東洋英和女学院
史料室だより No.96

2021.5.10 発行
東洋英和女学院
史料室委員会

アメリカ型図書館雑誌棚の前にたたずむ福田なをみ（国際文化会館図書室にて）

たくさんの和洋雑誌の新着号に囲まれたこの小柄な女性、福田なをみは東洋英和で学び、のちにライブラリアンとして国際的に活躍しました。今号では福田なをみの業績をたどるとともに、歴史の基盤となるさまざまな資料―図書や雑誌、文書、博物資料など―を「情報資源」として活用していく営為について考えていきます。

目　次

特　　集　・日米で活動したライブラリアン福田なをみ　小出いずみ …… 2
・鍵はアクセス―情報資源の構築に携わって―　…… 6
〈資料紹介〉38　『村岡花子文庫　洋書目録』から垣間見る村岡花子の横顔　梶原　由佳 …… 8
史料室から、ごきげんよう　オランダで語り継がれた、戦前の東洋英和の記憶 …… 11
〈東洋英和の先生がた〉6　ダフニ・ロジャース先生
―日本の人びとのよき友人、よき聞き手として生きる― …… 12
利用統計／史料室の活動より（2020年10月～2021年３月）…… 14

特集

日米で活動したライブラリアン福田なをみ

小出いずみ

今回の特集では、東洋英和の小学科で学び、そののちに国際的なライブラリアンとして活躍した「福田なをみ」（1907－2007）の足跡を紹介していきます。
ご執筆いただいたのは東洋英和の卒業生であり、公益財団法人渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター長などを歴任された小出いずみさんです。小出さんには、長年にわたりご尽力されてきた情報資源の構築に関わる自らのご業績についても語っていただきました。

調査の出発点

2008年、福田なをみの追悼記事を書こうと調べてみると、日米の図書館界に貢献した功績が案外知られていないとわかった。その後、カレンダー『姉妹たちよ　女の暦』2011年版で取り上げるために福田を調べていた升味久子さんに出会った。私は福田の職業的業績を追おうとしていたが、升味さんは、活躍した女性は生い立ちにその源泉がある、生い立ちを調べなければ、というのである。升味さんはすでに女子学院同窓会に問合せをしていた。一方、連絡がついた福田の姪小栗和喜子さんから、福田は女子学院ではなく東洋英和に行っていたと聞いた。英和の制服を着た写真を昔見せて貰ったそうだ。

当時、英和の史料室で仕事をしていた酒井ふみよさんにその話をすると、調べてみる、との返事だった。 しばらくすると、「List of Graduates and New Pupils」という宣教師の手書きによる大きな名簿に1915年9月27日付で名前があった、と知らせてくれた。しかも淀橋尋常小学校から、姉の花子と共に転入した時の入学願書も史料室に残っていたのである。これが福田なをみ調査の出発点だった。

幼少期と教育

福田なをみは、新宿の角筈にあったレバノン教会の牧師、福田錠二（1866-1951?）、紀子（としこ、1876-1915）夫妻の第五子として生まれた。栃木県生まれの福田錠二は、20歳でアメリカに渡り、シカゴのマコーミック神学校を卒業して1891年に帰国、1897年、角筈講義所の牧師となった。角筈講義所はレバノン教会となったが、女子学院創設の要となった宣教師ミセス・ツルーが設立した保養施設、衛生園に隣接していた。また、隣家には内村鑑三が住んでいて、あたりは文士村のような様相を呈していた。

母紀子は東京四谷のクリスチャンの家庭に生まれ、ミセス・ツルーの幼稚園の一期生となり、1895年女子学院高等科および保育科を卒業した。卒業後すぐに教職についたが、翌年福田に嫁した。結婚後、近隣の極貧者の子女のために貧民女学校を開き、簡易な読書、算術、習字を教え、手芸練習の手ほどきで雑巾を縫わせてそれを売りさばき、年二回生徒の反物や下駄などを買って給与した。婦人矯風会などの活動にも尽力したが、教職にもついて生計を支えた。一時に三つの仕事をする、と言われたように休む間もなく働き、家計を助けるために様々な仕事をした。母としての紀子は子どものしつけや教育に細かい心配りをした。年長の子どもが習ってきた英語を下の子たちの前で実地練習させたり、麻糸繋ぎの機械を入手して子どもに簡易な労働をさせ、それにより報酬を得ることを体験させた。創意工夫を実地に示し、貧乏でも他人の世話にならない独立心を育てた。

なをみが生まれた時（1907年12月２日）すでに福田家には、３人の兄と姉の花子（1905年４月生）がいたが、なをみの下にも今子（1910年１月18日生）、恵子（生年未確認）が生まれている。夫を助

け家計を支えていた母紀子は病に倒れ、1915年9月16日に7人の子を残して亡くなった。葬儀は親交のあった内村鑑三により執り行われた。没後に67名もの恩師・友人が寄稿した追悼文集が編まれたほど、紀子はキリスト教の信仰に篤く、多くの人から慕われた人物だった。

母の死の11日後に、7歳のなをみは、姉の花子と共に東洋英和女学校に転入した。当時は寮があり小学生も暮らしていたため、花子となをみは寮生活ができる学校に転入したのだろう。翌1916年9月には妹の今子も東洋英和に入学した。史料室に残っている成績表をみると、なをみの成績は上位だった。1920年3月、なをみは東洋英和女学校で小学校教育を卒業した。一方、姉の花子は1919年3月に退学、妹の今子は1922年3月に卒業、との記録が残っている。

なをみは英和を出ると女子学院に入学、その女子学院の教師の中には母紀子の親友三谷民子がいて、院長はA. K. ライシャワーだった。当時の女子学院の規模から考えると、なをみにとって院長はそう遠い存在でもなかったと思われる。なをみは1925年3月に女子学院を卒業した。

英語と日本語

女子学院を卒業した福田なをみは1925年4月、4年制になった東京女子大学の英語専攻部に進学し、再び寄宿舎生活をするようになった。東京女子大学は1918年、教派ごとに設置されていたキリスト教主義女学校を連合し、高等教育を授ける機関として女子学院の角筈校地（衛生園跡地）に創設され、創設に尽力したA.K.ライシャワーは常務理事となった。1924年、豊多摩郡上井荻村（現在の校地）に移転し、キャンパスには200人ほどが入れる寄宿舎ができた。1927年にキャンパスに完成したライシャワー館にライシャワー一家が明治学院から転居した。福田は1929年3月に卒業、ただ当時は大不景気が始まった時で、就職口がなかった。

翌年、福田は外国人のための日本語教授訓練校で学び、宣教師に日本語を教えるようになった。福田にとって大きな転機となったのは、A.K.ライシャワーの長男ロバート・ライシャワーの日本史研究の助手を務めたことだった。

R.ライシャワーは、ハーバード大学の学位取得のため日本で研究中だった。ライシャワー館の両親のもとに住み、1932年11月から2年間、東京女子大学でも教えた。この時、R.ライシャワーは後に *Early Japanese History*（*c. 40 B. C. －A. D. 1167*）として出版される書物を編纂していた。これはPart AおよびBの2冊からなる参考図書で、先に出版されたAは詳細な年表、Bは文献目録、日本語のローマ字化法、日本史用語の翻訳などで構成されている。Aの前書きに、この本は日本語を十分には読めなくても日本歴史に興味をもつ人のために、日本語の情報源からしか得られない詳細な情報を提供するもの、と編纂の趣旨がある。この前書きの最後近くに「二年間毎日歴史の語彙を教えてくれ、三年目には歴史の専門書を読むのを助けてくれた」と福田への謝辞が記されている。年表の項目一つ一つを福田が説明をすると、ライシャワーがそれを英語に訳すという仕事の仕方だった。福田は英語と日本語の橋渡しをするようになったが、通訳というより研究助手の立場だった。福田の将来の仕事に「外国人による日本研究」という方向性を与えたのは、この時の経験だったろう。

日本語教師とライブラリアン

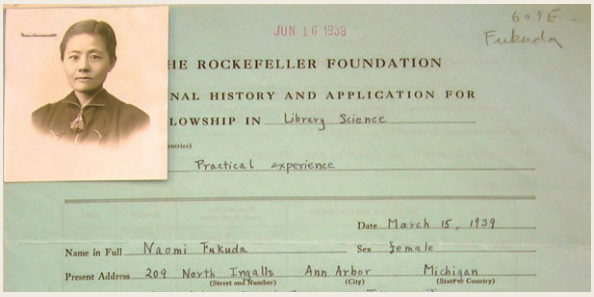
1934年7月、福田はR.ライシャワーに同行してアメリカに渡り、1935年秋には東洋女性のためのバーバー奨学金を得てミシガン大学の2年に編入学した。最初の3年間は教養学部で学び、その後図書館学履修を希望、奨学金で定められた4年間にB.A.（学士号）取得に加えて図書館学も学ぶ計画を立てた。ミシガン大学では1937年夏、極東研究講座（Institute of Far Eastern Studies）が開催され、福田は日本語クラスを担当したヤマギワの助手を務めた。この講座では、議会図書館（LC）の日本担当だった坂西志保が日本の詩歌について特別講義を担当した。坂西はミシガン大学で博士号を取得、バーバー・スカラーだったため、福田はおそらく以前から坂西と面識があっただろう。

1937年の夏、R.ライシャワーが上海で死亡した。彼から日本語教育とライブラリーの仕事を勧められていた福田は、「先生が亡くなるでしょ。それで残ったのはライブラリーの仕事だけになった」と語り、二つの可能性を示したいいアドバイスだった、と振り返っている。坂西との出会いもライブラリーの仕事に集中する覚悟を後押しし、福田自身は「ライブラリアンになったのは坂西さんの所為」とも述べている。福田は1938年の夏学期、再びヤマギワの助手として働きながら履修を続け、この夏、B.A.を取得して卒業し、1939年にはA.B.L.S.（図書館学学士）を取得した。1939年夏および1940年の夏学期にも図書館学を履修した。

福田が受けた図書館学教育は『図書館雑誌』の記

事に記されている。福田は各課目を紹介し、「系統立てて大局から」見る視点を学んだと評価している。また、当時図書館学を教え図書館長でもあったビショップの、人間の持つ最も貴い物即ち思想を取扱う図書館員は、教養があり、学術的研究に対して理解を持ち、人を指導する人格と事務的技術を兼ね備えて始めて館員としての義務が果たせる、との言葉を紹介している。おそらくこれが福田が目指そうと考えた図書館員像だったろう。

福田はロックフェラー財団から人文学のフェローシップを得て、1939年9月から1940年6月までLCで実習することになった。坂西志保のもとで助手をしながら、図書館の実際を経験した。日本人の典拠名ファイルを作成し、日本語逐次刊行物の記録を作成した。当時はローマ字化の標準が定まっておらず、カードの配列に必須の語の分割単位に共通基準もなかった。福田は目録業務に問題意識をもち、アメリカの図書館における日本語書籍の目録研究をテーマとした論文をミシガン大学に提出した。


JUN 16 1939
6-9E
Fukuda
HE ROCKEFELLER FOUNDATION
NAL HISTORY AND APPLICATION FOR
LOWSHIP IN Library Science
Practical experience
Date March 15, 1939
Name in Full Naomi Fukuda
Sex Female
Present Address 209 North Ingalls (Street and Number) Ann Arbor (City) Michigan (State or Country)

ロックフェラー財団申請書類、1939年（ロックフェラー・アーカイブ・センター所蔵）

青楓寮

1940年9月、帰国した福田が身を寄せたのは、英和の青楓寮だった。在学中でない福田がどのような事情で寄宿できたのかは不明だが、食料が乏しくなる中の生活は決して快適なものではなかったようだ。1941年夏に軽井沢で2週間過ごし、甘いお菓子が手に入った、と喜ぶ手紙が残っている。

当時福田は、東京帝国大学図書館の嘱託として働いていた。福田の仕事内容の詳細は分らないが、職場で唯一の女性として苦労する様子を坂西に書き送っている。日米開戦までは、LCの日本語担当部門の資料収集実務を手伝ってもいた。1943年11月からは外務省調査局に勤務した。英文の雑誌・新聞など情報資源から記事を選択し、関連情報をまとめる情報サービスを担当するのが福田の仕事だった。

GHQとNDL

1945年10月から福田はGHQ内の複数のライブラリーで働き、その中で国立国会図書館（NDL）の創立期に関わった。米国図書館使節が招聘され国立国会図書館法の基本案をまとめた時に、福田は使節と日本の図書館界のコミュニケーションの円滑化を支援した。設立されたNDLは、議会専用の図書館から全国民にもサービスを展開する図書館として生まれ変わることになった。福田は、この転換にあたり具体的な事業を組み立てるアドバイザーとして招かれたダウンズの助手となり、彼の現状把握および日本側関係者の理解深化を助けた。提出されたダウンズ勧告では、これまでの日本の図書館では等閑視されていた「文献参考サーヴィス」が主要部分を占めた。これらの経験は図書館の調査機能の重要性を福田に認識させた。調査機能は、総合目録や雑誌記事索引など各種の文献書誌サービスに基づいて発揮される。この点が日本の図書館界におけるレファレンス・サービスの普及への福田の活動につながって行く。

ダウンズと握手する金森徳次郎（国立国会図書館初代館長）、ダウンズの左横に福田なをみ、1948年

国際交流から日本研究へ（国際文化会館）

福田は1953年、ロックフェラー財団の支援を得て前年に設立された国際文化交流団体、財団法人国際文化会館の図書室長となった。洋書中心の蔵書計画でアメリカに書籍や雑誌を発注して購入し、同時に来日研究者の資料要求の相談に応じた。国際文化会館はとりわけ国際的な知的交流を重視していたことから、外国からの来訪者の大半が学者・文化人で、日本に関する知識・情報を求めていた。

国際文化会館図書室はアメリカ型の図書館のモデルだったため、NDLや大学図書館などの図書館員が福田の下に集まって研究会を開いていた。その中で、日本の図書館に当時定着していなかったレファレンス機能について疑問が出され、福田によって訪米調査団が組織された。福田は財政的な支援をロッ

クフェラー財団から引き出し、アメリカ図書館協会（ALA）の全面的な協力を取り付けた。アメリカ図書館研究調査団に参加したのは団長の福田を含め全国から選ばれた中堅図書館員９人で、約１年かけて準備会合をもち、事前学習を重ねた。そして1959年10月から２か月をかけてアメリカ中を訪問、アメリカの図書館について実地に見聞し、ALAによって各地で開かれた９回のセミナーに参加した。その結果図書館業務の中心にあるレファレンス機能は、情報資源に依拠するものであるとの理解を得た。レファレンス・サービスを図書館の仕組み全体の中で捉えたことでサービスを成り立たせる基盤について団員たちの視線が及び、団員は帰国後それぞれの課題に取り組んでいった。団員たちの努力があってその後日本において、例えば目録のネットワーク化などレファレンス・サービス、つまり図書館の情報サービスの基盤が着々と築かれた。福田自身はレファレンス・ツールの解題書『日本の参考図書』の編纂・刊行に取り組んだ。これは後に英文でも刊行された。その他にも福田は多くの書誌をまとめた。

福田の活動は図書館運営の枠を越えて、日本の図書館員・研究者がアメリカを訪問する際の紹介、日本の様々なプロジェクトへの資金調達の紹介・斡旋などにも広がっていた。例えば、村岡花子の家庭文庫研究会の活動資金の獲得もあった。

国際文化会館図書室は日本関係欧文書を集め、日本における日本研究の専門図書館として確立していった。福田は1963年にアメリカの日本語図書館を調査して回り、現状をまとめた。日本にあって欧文日本研究書を収集していた国際文化会館図書室にとってアメリカの日本語図書館は、同じ利用者層にサービスを提供するカウンターパートだった。日本研究のこの構図を福田は理解していた。

アメリカの日本研究ライブラリー（メリーランド大学、ミシガン大学）

福田は1969年に国際文化会館からメリーランド大学図書館に出向した。そこには歴史学部教授プランゲが持ち帰ったGHQの検閲資料中心の資料群があったが、環境の悪い地下倉庫に眠ったままだった。同大学では日本語資料を用いた研究・教育が始まるところで、新規購入の日本語図書もアーカイブズ資料であるプランゲの資料も一緒に扱われた。福田は日本語資料の整理が進まない問題を図書館だけに任せないよう、利用者である教授陣を加えたグループを結成、ステークホルダーを組織した。

1970年、福田はミシガン大学図書館アジア図書館に副館長として赴任し、1978年まで働いた。同館の日本語コレクションは当時全米第５位の規模で、福田は日本語図書の収集とレファレンスを担当するBibliographerの仕事を兼務した。年間資料購入予算の半分以上は外部資金に頼っていて、絶えず助成金申請と報告を念頭において仕事をしていた。福田の任期中の年間増加図書数ではLCに次ぐ第２位を他の大学図書館と競った。福田の度重なる日本への資料収集旅行と人脈によって開拓された成果といえる。1970年代のミシガン大学の日本研究の主力、社会科学分野を中心に広範な日本語資料を収集、福田の任期中にマイクロフィルムの資料が顕著に増加した。明治期から刊行の新聞・雑誌や戦前の政府資料など、研究の一次資料として用いられる情報資源の収集に注力した結果だった。さらに福田は、アメリカの日本語図書館のネットワーク作りにも取り組み、退職後には現状調査報告書を出版した。

福田宅でミシガン大学の学生たちと、1986年４月

日米両方の各種のライブラリーで働いた福田が一貫して取り組んだのは、図書館の基本機能である蔵書構築であり、また、各種の書誌などレファレンス・ツールの編纂・出版、図書館現状調査に基づく情報資源案内などだった。福田はライブラリーにおいて必要とされるサービスを積極的に繰り広げ、調査や出版のプロジェクトを企画し、財団から資金を引き出し、各地を歩き回る能動的なライブラリアンだった。利用者の要請に応じて図書館サービスの枠を越えて様々な斡旋をする、日米それぞれにおいて―あるいは日米間で―他の図書館の相談に応じるなどの活動を通じて、ライブラリーの機能とは何か、ライブラリアンは何ができるのかを示した。福田は生涯をかけて、日本の図書館活動の基盤を現代化することに貢献し、アメリカでは日本研究図書館のネットワークの礎を築き、日米両国でライブラリーが機能できる環境を作り上げることに貢献した。日米交流の隅の頭石だったといえよう。

特集

鍵はアクセス―情報資源の構築に携わって―

小出いずみ

私が国際文化会館に就職したのは1980年、当時映画「影武者」がアメリカで人気を博し、また前年にエズラ・ヴォーゲルの*Japan As Number One*が出版されて日本に興味をもつ若者がとくにアメリカで増え始めたころだった。続く1980年代は世界経済において日本が台頭し、日本に対する興味・関心は、文学や歴史から、日本の台頭の原因を探るように、教育や経営にまで広がった。

国際文化会館図書室は小規模ながら、欧文日本研究書を中心に収集する日本研究の専門図書館だった。主な利用者は日本について研究している学者や大学の教員たち、博士論文の研究のため来日して調査している大学院生たちで、アメリカ人が多かった。したがって、図書館は、あるいは司書は、こういうサービスをしてくれるもの、という図書館サービスに対する期待水準がアメリカ並みだった。

図書室のカウンターにいると様々な質問を受けた。図書・雑誌など図書館資料の所在探索に始まり、歴史的な事実調べ、人物・団体調べ、統計、などなど。質問者はたいていアメリカ人なので質問の角度、見方が日本人とは異なりユニークな場合も多かった。回答するために様々な参考図書を調べていくうちに、聞かれた方にも知識が蓄えられ、知的刺激に満ちた仕事だった。質問者の研究が出版され、その書籍の謝辞に自分の名前を発見するのは楽しみだった。

1980年代から1990年代にかけて、情報通信技術の進展により、図書館の目録が電子化されてOPAC（Online Public Access Catalog）になり、書誌ユーティリティ（図書館横断的に検索できる総合目録）で各館のOPACがまとめて検索できるようになった。図書館資料の所在探索は劇的に楽になり、ILL（図書館間相互貸借）の仕組みも整備されて、資料へのアクセスは格段に向上した。

このようにコンピュータ端末とデジタルネットワークにより、遠隔地にあるものも含めて図書館資料全体を見渡せるようになると、なぜか探せない資料群があるのに目が行くようになった。学術研究は素材となる一次資料に基づいて行われる。そこで所在探しも図書館資料だけでなく、例えば政治家の手紙や日記、団体の記録などの一次資料、つまりアーカイブズ資料を探さないとならないが、こういう資料の所在を探すのが難しい。そのうえ所在がわかっても、なかなか見せて貰えない。公開の所蔵目録が少ない博物館の世界では、特別観覧、という手続きを取らないとみることができない。探しにくいうえにアクセスも容易でない。なぜ一次資料、なかでも記録資料は情報資源化されていないのだろうか。

一次資料を含む文化資源は、図書館・アーカイブズ（文書館）・博物館等に所蔵されている。館の種類を所蔵資料の種類からみると、図書館には図書や雑誌のような刊行物、アーカイブズには文書などの記録資料、博物館にはモノ資料、と一見分かりやすく分かれているようだが、実態はそうでもない。図書館や博物館にも文書資料や記録資料が所蔵されているし、アーカイブズや博物館にも刊行物がある。リサーチをする人にとっては、探している資料がどこにあろうと、見て調べて研究したいのである。学術研究における一次資料の重要性とその情報資源化の必要性を痛感した。アクセスが難しいだけでなく所在すらなかなか探せない、アーカイブズの世界ではどのように情報資源化が行われているのか関心をもった。

2003年秋、実業史研究センターという部署を新設するために渋沢栄一記念財団[1]に招かれ、転職した。渋沢敬三（1896-1963）が構想した「実業史博物館」を現代に実現するのが与えられた任務だった。渋沢敬三は、栄一（1840-1931）の孫で銀行家だったが、民具を収集したアチック・ミューゼアムを始めたり豆州内浦漁民史料を発見・整理するなど、史資料に関心のある人物だった。実業史博物館は栄一を記念して構想されたが、栄一だけでなくその時代背景や関連人物にまでの視程をもつものだった。また、敬三の主導で『渋沢栄一伝記資料』（全68巻）が編まれた。これは後世の人が栄一の伝記を書けるように資料を集めておく、という趣旨で作られた資料集で、栄一宛、あるいは栄一の手紙、日記・日誌、公文書、新聞・雑誌記事、図書の一部など幅広い資料が採録されている。

財団は博物館法に依拠した渋沢史料館を運営しており、所蔵資料は渋沢栄一に関するモノ資料、記録史料、刊行物だった。実業史博物館のために収集された資料は、すでに国立民族学博物館、国文学研究資料館、神奈川大学などに移されていた。それを再び収集し所蔵することは叶わないため、現代的実現はデジタル化による外はない。そこで部署の名称に「情報」を入れ、実業史研究情報センターとした。そして渋沢栄一と実業史を切り口に、日本の産業化近代化の大変動期について、様々な文化情報資源を作り出すことを目指した[2]。

『渋沢栄一伝記資料』はそもそも博捜された資料を収集・採録してあり、個人アーカイブズといえる。渋沢栄一研究の基幹資料であるだけでなく、日本の近代化についても豊富な資料を収録している。およそ4万ページの伝記資料は、索引巻があるものの、構成が複雑で、ほしい情報へのアクセスは決して簡単ではない。そこでこの全文をデジタル化し、検索できるようなデータベースにすることを企画した。これには莫大な費用が必要だったが、渋沢雅英理事長の英断で予算措置を得、10年余りかけて完成して2016年にウェブサイトで公開できた。

デジタル版伝記資料は、公開前の内部利用の時点からデータベースとして活用された。今までは本棚数段を占める全68巻の冊子体の資料集のページをめくって目的の箇所を探索していたのが、机上のパソコンで検索すれば該当箇所が表示されるため、格段にアクセスがよくなった。公開後は世界中からアクセス可能になり、一層利用されるようになった。

デジタル技術を用いた情報資源化によってアーカイブズ資料へのアクセスは容易になり、活用範囲は格段に広がる。近代日本政府の文書をデジタル化してウェブサイトで提供している「アジア歴史資料センター」[3]のデータベースはその好例といえる。

最低限の情報資源化は目録の作成によって実現できる。ただ図書館資料とアーカイブズ資料の目録化は考え方がかなり異なる。図書館資料は1点1点の刊行物を対象とする、いわば下からの目録記述だが、アーカイブズ資料は共通する発生源を第一段階の対象とし資料を群としてとらえる、いわば上からの目録記述である。図書館資料の目録は標準化・共通化されていて、かならずしも学術研究者でなくても一般に広く使われている。一方、アーカイブズ資料の目録は史資料館ごとに少しずつ作成・公開されるようになってはきたが、共通化され、統合されている日本の例は、アジア歴史資料センターがあるのみ、と言っていい。

アジア歴史資料センターの優れている点は目録情報の横断検索に止まらない。資料自体を画像で公開し、目録から資料へのアクセスを切れ目なく導いている。アジア歴史資料センターに続き、2005年度には国立公文書館も公文書など重要文化財の一部を提供するデジタルアーカイブを開始した。さらに東京国立博物館も2007年以降、順次、館蔵品の写真や所蔵する和書・洋書・漢籍をデジタルライブラリーで公開するようになった。デジタル化と公開により、資料へのアクセスは飛躍的に容易になった。

資料は使われて初めて価値を発揮する。構築された資料群を情報資源として利用可能にする鍵は目録の公開であり、究極的にはアクセスの提供にある。現在および将来の利用者に対してアクセスを提供する。これは、人間の、そして社会の記録が歴史を貫いて蓄積され残されていく図書館・アーカイブズ（文書館）・博物館に共通する役割であり課題である。

1 https://www.shibusawa.or.jp/

2 センターの活動については「文化資源を作り出す」『びぶろす』平成19（2007）年10月号（電子化38号）所収。https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3526016_po_38.pdf?contentNo=1&alternativeNo=

3 https://www.jacar.go.jp　2001年11月開設。

〈執筆者プロフィール〉小出　いずみ　（こいで・いずみ）

1969年東洋英和女学院高等部卒。1978年同志社大学大学院神学研究科修了、修士論文は「明治前期の女子教育とキリスト教」。東洋英和の教育を歴史的文脈の中で捉えようとしたが、明治前期がおもしろかったため中心は英和以前になった。1980年ピッツバーグ大学大学院図書館情報学科修了、図書館学修士。この学位は職業生活を歩む支えになった。2004年東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻に社会人入学、2008年修士課程修了、修士論文「国際関係の中の歴史資料政策―アジア歴史資料センターの設立過程について―」。2020年4月に博士号取得。博士論文は『日米交流史の中の福田なをみ―「外国研究」とライブラリアン―』として来年、勉誠出版より出版予定。

〈資料紹介〉38
『村岡花子文庫 洋書目録』から垣間見る村岡花子の横顔

梶原 由佳

史料室委員会では、今年3月に『東洋英和女学院 資料集第7号 村岡花子文庫 洋書目録』を刊行いたしました。2014年度に学院に寄贈された村岡花子の蔵書のうち、すでに和書約1200冊の目録については2018年度に刊行し、2020年度は残りの洋書約800冊の目録刊行となりました。
今回の資料紹介では、トロント公共図書館に勤務し、モンゴメリ研究家でもある梶原由佳さんに、コロナ禍で来日・来室が叶わない状況ながら、洋書目録データをもとにしてリモートで村岡花子の洋書コレクションの魅力を語っていただきました。洋書目録からの書誌情報も付記してご紹介いたします。

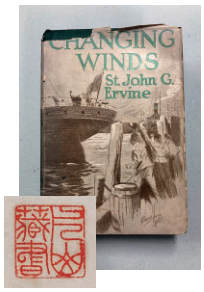
「私はよくよく本を読むことが好きと見えて、すべての思い出がほとんどみんな、書物と結びついているようである。私にとって一冊の書物はその本を読んだ時、その折々の自分の心の状態の記念のような気がする。」
（『村岡花子随筆集　昔の先生たち』61-62頁）

蔵書の一冊一冊に思い出が結びついているというのだから、『村岡花子文庫 洋書目録』には、なんと想像の余地があることだろう。書誌情報は、淡々とした事実の記載のみで、一見素っ気ない。それでも今回の目録の「備考」と「挟込み資料」の項目を紐解けば、その持ち主の思いが浮かび上がってくる。

一体どんな本を持っていたのか。索引の頁を捲ると、何よりも、その数多の著者名や書名に圧倒される。書名をアルファベット順に追っていた友人が、ため息とともにひと言叫んだ。“Erudite, Hanako!”まさしく、この目録から垣間見えるのは、生涯、知の追求を止めることのなかった一女性の横顔である。

思うに、記載されている数以上の書籍を村岡花子は所有していたはずだ。甲府の山梨英和女学校で教鞭をとっていた頃の彼女に、敬愛する片山廣子(*1)は新刊の英書を送っていたという。目録には二人の親しい間柄を表すように「片山蔵書」が含まれている。

登録番号Y0541／書名*Changing winds : a novel*／著者名Ervine, St.John G.／出版地New York／出版社Macmillan／出版年c1917／備考：「片山蔵書」見返しに押印。「KYOBUNKWAN」ラベル貼付



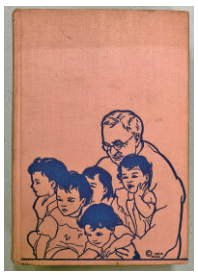
他にも友人知人から得た本も相当数あったことだろう。教職を離れたのちに出版業に身を置いた経験からも、花子は海外の出版事情に明るく、洋書購入もたやすくできる環境にあった。蔵書の中には、勤めていた「KYOBUNKWAN（教文館）」のラベルが貼られたものが多数ある。

今も残るこれらの書は、関東大震災や太平洋戦争の惨禍を免れてきたものだろうか。引越しの際には、文学に通じている古本屋を呼んで処分したことがあったというから、あの片付け専門家(*2)風にいうと、花子の胸をときめかせた本のみが残されてきたと思われる。それだけに尚更のこと、目録の書籍が気になってくる。

東洋英和女学校でカナダ人女性宣教師の元で学び、のちに翻訳家として名を馳せた花子の経歴を鑑みて、宗教や英文学関連書が重きを占めるのは当然ながら、著者名索引には、経済学者アダム・スミス（Adam Smith）、哲学者スピノザ（Benedict de Spinoza）、社会人類学者フレイザー（J.G.Frazer）、自然科学者ダーウィン（Charles Darwin）の名も登場している。

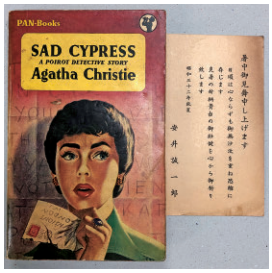
また、書名索引を眺めてみると、child, children, woman, womenの単語が目立つ。文化人としての花子は、女性問題、育児や教育関連でも頻繁に意見を求められていた。それ故、女性や子どもを主題にした書物は参考文献として大いに活用されたことだろう。育児関連では、***Dr. Dafoe's Guide Book for Mothers***の本がある。著者アラン・ロイ・ダフォー（A.R. Dafoe）はカナダの産科医で、1934年にディオンヌ家の五つ子を無事に誕生させた名医として一躍その名を馳せた。当時、五つ子のニュースは世界中で持ちきりだったというが、ダフォー医師の育児書も持っておられたとは！ 花子は、相当、時の話題に敏感だったようだ。

登録番号Y0445／書名*Dr. Dafoe's guide book for mothers*／著者名 Dafoe, A.R.／出版地New York／出版社Julian Messner／出版年c1936／備考：p.90-p.100 切取り



意外だったのは、ミステリーの女王アガサ・クリスティー（Agatha Christie）の作品が多数含まれていたことだ。名探偵ポアロが登場する『杉の柩』（*Sad Cypress*）には、安井誠一郎からの暑中見舞いが挟まれている。1955年ヘレン・ケラー来日の際に通訳を務めた花子は、当時、東京都知事だった安井との出会いがあった。

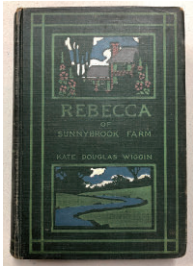
登録番号Y0231／書名*Sad cypress*／著者名Christie, Agatha／出版地London／出版社Pan Books／出版年1954／挟込み資料：暑中見舞い　安井誠一郎→村岡花子



出会いといえば、ケイト・ダグラス・ウィギン（K.D. Wiggin）の作品との出会いは、花子にとって特別だったことだろう。ウィギンの*Rebecca of Sunnybrook Farm*を村上文樹が『野育ち』の書名で訳出したのは1940年のことだった。翌年1月の『少女の友』に、花子はそのブックレビュー(*3)を寄せている。村上が同作品の序文にて、「アカデミックな意味での『文学』というものの本流からいえば、あるいはほとんど問題にするにも足らないものかも知れませんけれども」と述べていることに対し、花子は「同意ができません」と反発し、原題とかけ離れている『野育ち』の書名にも苦言を呈している。

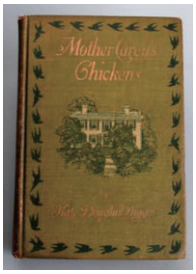
ウィギンを「もっとわが国に紹介されていい著者」と強く思っていた花子が持っていた*Rebecca of Sunnybrook Farm*（1904）は、Miss Hargraveから贈られている。出版社は、カナダのトロントにあったWilliam Briggs。このことからMiss Hargraveはカナダに住む人で、日本で花子と知り合った宣教師だったかもしれない。思い入れのある著者の作品で、更に、友人から贈られたものならば、とても大切にしていただろう。などと推測していたら、「Miss Hargraveは、東洋英和にいらした宣教師の先生です」と史料室の方から教わり、なんだか推理が当たった探偵の気分を味わった。目録情報から、あれこれ想像するのは実に楽しい。

登録番号Y0765／書名*Rebecca of Sunnybrook Farm*／著者名Wiggin, K. D.／出版地Toronto／出版社William Briggs／出版年1904／備考：「Miss Hargrave」から「Hanako san」への献辞、見返しに書込み



さて、ウィギンといえば、彼女の小説『ケレー家の人びと』または『ナンシー姉さん』（*Mother Carey's Chickens*）は、花子の運命を決定付けた書といえる。学生時代に、同小説を読む花子の姿を認めた「米国の人」から、父母も子どもも楽しめる読み物が日本には少ないと指摘された花子は、「姉も妹も父も母も一緒に集って声出して読んでも、困るところのないような家庭向けの読み物」を世に出したいと思い始める。その思いを自著『爐邊』（1917）のはしがきにて「熱い祈」と表現している(*4)。十代の頃に読んだ海外小説に感銘を受け、それらを翻訳して日本の読者に届けたいという「祈」を、その後、花子は、自身の力で実現していくのであった。

登録番号Y0599／書名*Mother Carey's chickens*／著者名Wiggin, K. D.／出版地Boston／出版社Houghton Mifflin／出版年c1911／備考：「村岡花子　重要」見返しに書込み。「村岡花子蔵書」後見返しに書込み

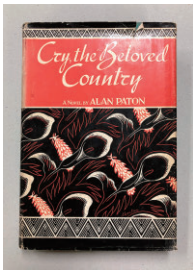


生涯を通して花子が力を注いだのは、カナダの作家モンゴメリ（L.M. Montgomery）作品の紹介であった。第二次大戦が近づく中、カナダの宣教師ミス・ショーから友情の証として贈られた*Anne of Green Gables*（初版1908）が現存するのは感慨深い。奥付を見れば、出版初年度だけでも6月以降毎月増刷されたベストセラーとわかる。花子は、Anneの北米での人気を察知し、日本の少女たちに、ぜひとも紹介したいと思ったことだろう。

登録番号Y0762／書名*Anne of Green Gables*／著者名Montgomery, L.M.／出版地Boston／出版社L.C. Page／出版年c1908／備考：署名「L.L. Shaw」見返しに書込み。口絵さし絵にメモの張り込みあり。標題紙に「村岡蔵書」押印。「村岡花子住所印」本文に押印。破損のため村岡家で修復

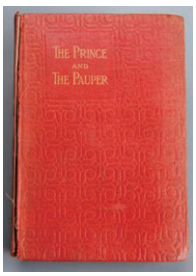
モンゴメリ作品のみならず、日本に初めてアラン・ペイトン（Alan Stewart Paton）の著作『叫べ、愛する国よ』（*Cry, the Beloved Country*）を紹介したのも花子であると、元東洋英和女学院院長の船本弘毅は述べている。ペイトンは、アフリカのアパルトヘイト（人種隔離政策）に異を唱えた政治家で、彼の著作は英語圏では広く読まれていた。船本は、「村岡さんは、社会に対し、人間に対し、鋭く温かい目を持つ方」と評している(*5)。

登録番号Y0611／書名*Cry, the beloved country*／著者名Paton, Alan／出版地New York／出版社Charles Scribner's／出版年c1948／備考：「村岡蔵書」見返しに押印／挟込み資料：①村岡花子原稿用紙1枚 ②東京Y.W.C.A.会員証



モンゴメリやペイトンの著作を始め、目録には花子が訳した数々の作品が含まれているが、「門外不出」と書き込まれた重要な書もあるようだ。その中でも、1926年に長男道雄が幼くして病で亡くなった直後、失意の中で翻訳したというマーク・トウェイン（Mark Twain）の『王子と乞食』（*The Prince and the Pauper*）は、海外の家庭小説を日本中の子どもたちに届けたいという自身の志を新たにした特別な書であったことだろう。

登録番号Y0761／書名*The prince and the pauper: a tale for young people of all ages*／著者名Twain, Mark／出版地London／出版社Chatto & Windus／出版年1924／備考：本文に書込み。「Hana Muraoka, July, 1924 重要村岡花子」見返しに書込み



そのほか、備考欄を見ていくと、Hana Annakaの名に目が止まった。それらは、明らかに結婚前の若き日のもの。他にも学生時代に贈られたとみられる*Studies of the Portrait of Christ*の献辞には、To Annaka San from "The Three"とある。「安中さん」と親しく呼びかけたこの三人組（？）は、大変近しい存在であったことだろう。学生時代に暗記するほど読み込んだというテニソンの本には、文中に書き込みがされたものが幾冊かある。学業に専念した花子の姿が仄見えるようだ。愛読書の中でも、花子の日々の執筆を助けたのは、夫の儆三から贈られたWebsterの大辞典であろう。

目録情報には、想像の余地が有り余っている。著者名や書名からは、所有していた人の趣味趣向や知的好奇心が推しはかれる。出版社名や出版年からは、その時代の雰囲気を感じ取ることができる。備考欄にて本の来歴を知り、贈り主が書き込んだメッセージから交流関係に思いを巡らす。そして、殊にこの洋書目録の場合、「挟込み資料」の欄が見逃せない。書籍の頁に挟まれていた栞や名刺、絵葉書とクリスマスカード、四葉のクローバーや花弁の押し花、鉄道の荷札、定期預金の入金票、それに、着物の仕立ての請求書らしきものもあって、多方面で活躍していた花子の日常を垣間見る思いだ。

日曜の午後、ひとり洋書目録を眺めていたら、ぎっしりと本が並ぶ書架を背に、窓辺の席でペンを執る着物姿の花子が浮かんできた。そして、机上の書物に目を落としている、その知的な横顔をちらりと私に見せてくれたのであった。

＊1：片山廣子（1878-1957）歌人、アイルランド文学翻訳家。東洋英和女学校の初期卒業生。
＊2：近藤麻理恵。ときめくものだけを残す方法を勧める「こんまりメソッド」で有名な片付けコンサルタント。
＊3：『村岡花子と赤毛のアンの世界』（村岡恵里編、149-150頁、河出書房新社、2013年）
＊4：同上（16-17頁）
＊5：船本弘毅「村岡花子さんとの出会い」（『村岡花子随筆集 昔の先生たち』3-9頁、東洋英和女学院同窓会、2004年）

〈執筆者プロフィール〉梶原　由佳（かじはら・ゆか）
鹿児島大学教育学部卒。カナダ、オンタリオ州、トロント公共図書館オズボーン・コレクション室勤務（Osborne Collection of Early Children's Books, Toronto Public Library）。オンタリオ州ルーシー・モード・モンゴメリ協会会員（Lucy Maud Montgomery Society of Ontario）。

L.M. モンゴメリの銅像と座る梶原由佳さん
（カナダ リースクデールにて）
撮影：D. Jason Nolan

かえでくん

オランダで語り継がれた、戦前の東洋英和の記憶

ミンニー・スネルレン（Minnie Snellen）さん（1940年卒業、2019年召天）のご息女マイカ・ファン・デア・ローン（Maaike van der Loon）さんとご令孫フィオナ・ミンニー・ファン・カンパン（Fiona Minnie Van Kampen）さんが、日本に住むご友人の有馬典子さんと共に東洋英和を訪ねていらしたのは、2020年3月のことでした。中高部校舎をご案内した後、史料室所蔵の資料をご覧いただきながら、ミンニーさんにまつわるお話の数々をうかがい、貴重な当時の画像データを多数ご恵贈いただきました。

中高部正門前にてマイカさん（左）とフィオナさん（右）母娘。ミンニーさん在学の頃もこの門は使われていた

在日オランダ公使館通訳のお父様の関係で、日本生まれ日本育ちのミンニーさんは、現在の港区芝にある公使館（今は大使館）から歩いて東洋英和に通学し、弟さんも同じく幼稚園に通っていました。ミンニーさんに関する資料は、学籍簿・在学証書などの他、校友会誌「楓」、「東洋英和ニュース」（1937年2月10日）に「スキー日記」などが残されていました。「楓」第10号（1940年）「歌絵巻」には次の短歌が掲載されていました。

染物の糸をほどけば次々に
　　鹿の子絞りの白き輪の見ゆ　　スネルレン

マイカさん達に歌の内容を伝えると、鹿の子絞り＝Tie Dyeとして、ミンニーさんから日本の染め物のことが教えられていたことが分かりました。ミス・ハミルトンの日本語のあだ名「ハミちゃん」も、ミンニーさんは家族の前で繰り返し口にしていたそうです。

1940年3月に高等女学科を卒業すると、厳しい世界情勢により一家は4月には船でオランダへ帰らねばなりませんでした。帰国の際は大勢の友人が見送りに集まり、美しく彫られた銀のブレスレットが記念に贈られたそうです。その品は今もファン・デア・ローン家に大切に保管されています。帰途では困難が続き、5月にドイツがオランダを占領したためジュネーブに一時滞在、4ヶ月後にやっとオランダに戻ることができました。

ミンニーさんと英和の親友との手紙のやり取りは生涯にわたって続き、1981年には日本を再訪、英和に立ち寄った際は歓待を受けたといいます。またフィオナさんが2013年に来日し英和を訪問した折に学校のDVDを贈られ、ご高齢のため記憶が不明瞭になり始めていたミンニーさんに見せたところ、突然立ち上がり英和の校歌を一緒に歌い始めたそうです。

ミンニーさんの英和での想い出は、オランダに帰国後も繰り返し語り継がれ、数々の写真と共にご家族にもしっかりと受け継がれていたのでした。

（左）小学科時代のミンニーさん
（中）同上（弟と通学中？）
（右）妙高高原でのスキー教室に参加したミンニーさん（右から二人目）
画像提供：マイカさん、フィオナさん

〈東洋英和の先生がた〉6
ダフニ・ロジャース 先生
―日本の人びとの よき友人、よき聞き手として生きる―

「ロジャ子先生」の楽しい思い出

東洋英和に遣わされた最後期の宣教師の一人であったダフニ・ロジャース（Daphne Rogers）先生は、30年以上の長きにわたって日本に滞在し、宣教師としてご奉仕された。ロジャース先生を知る人たちがまず思い起こすのは、あの朗らかなお人柄だろう。

中高部で一緒に働いていた神藤真理先生は「ロジャース先生、懐かしいです。社会科研究室でロジャース先生とお親しかった鳥居美子先生が入れてくださったコーヒーをご一緒したりしました。『ロジャ子先生』なんて、恐れ多くもお呼びしていました。英語があまり得意でない私に一生懸命話しかけてくださいました。今思い出しても素晴らしい、意思の強い素敵な方でした」と先生を偲んでいる。

「ロジャ子先生」はご自身でも、「ユーモアの感覚が非常な助けとなる」と語り、ある時壇上でスピーチをする際に「どうしたわけか片方のスリッパがステージの向こう側まで飛んで行ってしまいました！！」と愉快なエピソードを紹介している。生徒たちも、ユーモアにあふれるロジャース先生をからかってふざけると「シツレイデスヨ！」と言われるのをまた面白がって、みんなで口真似するなど、随分ご苦労をかけたものである。

待望の長期就任の宣教師

東洋英和に宣教師を派遣していたカナダ合同教会の婦人ミッションは年次報告書を発行しており、その1958－1959年版からミス・ロジャースの就任事情がうかがえる。当時、日本滞在の宣教師は徐々に減少傾向にあり、東洋英和にも勤めたルエラ・ローク先生、山梨英和で敬慕されていたキャサリン・グリンバンク先生など、長年日本で奉仕活動を行ってきたベテラン宣教師たちが4人も引退し、戦後から始まった「J3（ジェイ・スリー）」という3年間の短期赴任の宣教師たちの帰国も重なった。婦人ミッションでは、さらなるカナダ人宣教師が必要であり、学校に短期就任の宣教師だけしかいなくなってしまったら、東洋英和、山梨英和、静岡英和にとって深刻な事態になると報告がある。そうした中で、短期の就任ではない若手のミス・ロジャースの指名は貴重であり、それは婦人ミッションにとっても日本側の学校にとっても非常に喜ばしいことだったという。

ミス・ブラックモアがつないだ日本への縁

アルバータ大学で教育学を学び、教会の婦人奉仕員としての訓練を積んでいたミス・ロジャースは、海外派遣の宣教師についての手紙を受け取っていた。小さい頃は病弱だったため海外への赴任など思いもよらなかったが、大人になると体力もつき、出来るかもしれない…と宣教先のリストを眺めた時、ミス・ロジャースの目に留まったのは日本だった。

ミス・ロジャースと日本との縁は、先生の幼少期の体験にさかのぼる。佐藤順子元高等部長は『カナダ婦人宣教師物語』のエッセイで、ロジャース先生は牧師の家庭に生まれ、祖父もおじ達も牧師という環境に育ち、先生の父が牧会していた教会〔ノヴァスコシア州ヤーマスの中央合同教会〕には、東洋英和で4度も校長を務めたミス・ブラックモアが引退後に所属していたと紹介している。ミス・ブラックモアは若い牧師夫妻だったミス・ロジャースのご両親を温かく支えていたという。ミス・ブラックモアの思い出は、幼いミス・ロジャースの心に「日本」のことを深く印象づけた。

伊勢湾台風直後の来日

ミス・ロジャースがいよいよ日本にやって来る1959年秋、カナダとの通信担当だったマシューソン先生の書簡には、緊迫感あふれる記述が見られる。9月26日に紀伊半島から上陸した台風は三重県、愛

知県を中心に日本全国に甚大な被害をもたらした。伊勢湾台風だった。その中、ミス・ロジャースを乗せたヒマラヤ号は日本に向かって航海しており、船が横浜に到着したのは10月2日だった。ミス・ロジャースともう一人のJ3宣教師のミス・ビーコムの無事の到着に接し、マシューソン先生は「本当にうれしい」と安堵の報告をカナダに送っていた。まさに波乱の来日だった。

学校の外にも広がる奉仕活動

来日したロジャース先生は東洋英和だけでなく、姉妹校である静岡英和、山梨英和にも赴任、活躍の場は学校に限らず、キリスト教社会福祉法人・キリスト教児童福祉会の理事も歴任し、鳥居坂教会でも聖書研究を通して奉仕を行うなど精力的に献身した。

たとえば、当時青山学院大学宗教主事だったジャン・クランメル教授が青山霊園の一角にある明治期以来の外人墓地が荒れ果てていることを嘆き修復を呼びかけると、ロジャース先生もそれに賛同し、鳥居坂教会で行われた「D.ロジャース宣教師来日30周年記念感謝の集い」の礼拝献金と、講演会、感謝会で捧げられた献金の全額を、墓地修復のために寄付された。何人ものカナダ合同教会関係の宣教師たちが眠るこの墓地についてロジャース先生は「宣教師の方々が日本の同労者と共に如何に大きな働きをなされたかを聞く時、私たちは心から奮い立たされるのです」と生前に語っている。ご召天ののち、ロジャース先生の遺灰の一部はご遺志により、ゆかりの青山霊園に納められた。

戦後の宣教師としての役割

元中高部の奈良みどり先生は「友達大好き人間」だったロジャース先生について回想している（「楓園」59号）。遣わされた多くの場所でロジャース先生は交流を深めた。最晩年に先生は「日本での生活、日本で得た友との交わりの思い出と、今も続いている友情が、現在生きる上での土台の一部になっている」と感謝の言葉を口にしていたという。

ロジャース先生は「日本の地に遣わされて」（「敬和会」52号）という寄稿の中で、戦前のベテラン宣教師たちと一緒に過ごし、戦後に宣教師となった自分は「ミッションの仕事が何年にもわたってどのように変って来たかを知ることができました」と

先輩の宣教師と日本人教員とともに（1960年、旧宣教師館にて）前列向かって左から2番目が若き日のロジャース先生

語っている。宣教先の教会や学校が自立し、もはや宣教師が教会の牧師職に就くのでもなく、学校において校長などの管理職になるのではない時代に、自分の宣教師としての役割を考えた時、ロジャース先生が試みたのは「よき友人、よき聞き手となり、人々の助けや支えとなること」だった。宣教師として一方的に教え諭すのではなく、同僚として日本人とともに伝道の業に励んだロジャース先生の生涯は、着実に日本の地と日本の友人たちに豊かな恵みをもたらすものだった。

松本　郁子（史料室）

ダフニ・ロジャース（Daphne Rogers）先生
―略　歴―

1930年5月27日	カナダ・ノヴァスコシア州ヤーマス生まれ
1949年～1950年	エドモントン通信教育学校教育課勤務
1952年～1957年	カナダの小学校に勤務
1956年	アルバータ大学教育学部卒業
1959年	トロントのカナダ合同教会トレーニングスクール卒業
1959年	来日
1960年～1962年	東洋英和女学院中高部で教える
1962年～1964年	静岡英和女学院で教える
1965年	ヴィクトリア大学大学院 Master of Christian Education 取得
1965年～1975年	山梨英和学院、同短期大学で教える
1976年～1994年	東洋英和女学院中高部・小学部で教える
1979年	鳥居坂教会協力宣教師となる
1990年～1994年	東洋英和女学院　理事、評議員
1994年5月	帰国
2009年10月24日	カナダ・エドモントンにて召天（享年79歳）

利用統計（2020年10月～2021年３月）

		10月	11月	12月	1月	2月	3月
展示見学者数		—	—	—	—	—	—
展示見学者区分	学内関係者	—	—	—	—	—	—
	一般	—	—	—	—	—	—
新型コロナウィルス感染防止のため2020年4月9日より展示コーナーは休業							
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
資料閲覧者数（累計）		2	6	1	0	4	4
閲覧者区分	本学学生・生徒						
	現教職員	1	4			2	4
	旧教職員			1			
	同窓生・学院関係者		2			2	
	同窓生（研究者）						
	他校研究者・学生	1					
	一般						
利用の目的	年史編集		3	1			
	著述・論文作成	2				1	4
	伝記資料調査						
	記録類の調査・研究		1			3	
	学院広報関係		1				
	その他		1				
資料の種類（重複あり）	東洋英和関係	2	6	1		2	4
	カナダの教会関係						
	村岡花子関係					1	
	周辺地域史					1	
	その他						
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
月別レファレンス件数		15	12	7	13	15	20
質問者の区分	本学学生・生徒						
	現教職員	8	3	3	2	9	9
	旧教職員	1					
	同窓生・学院関係者		2	1	3	1	4
	同窓生（研究者）						2
	外部研究者・学生	1		2	3	4	2
	外部研究機関	1	2	1	1		1
	一般	4	5		4	1	2
質問内容（重複あり）	資料所蔵調査	2	2	4	3	8	6
	写真所蔵調査		2	3	4	1	2
	事項調査	10	7	5	7	10	13
	その他	4	2	1	2	1	2

史料室の活動より（2020年10月～2021年３月）

（☆は複数回）

2020年10月

・1日　コロナ禍のため追悼記念日礼拝は限定して実施

・1日　研修―オンラインにて大学史資料協議会の研究会「コロナ禍における大学史関連業務の現状について」参加（三笠）

☆野尻50周年記念誌作成のため、関係者からの資料・画像収集、野尻関連資料や写真の分類・整理、取材、歴史・年表・施設の変遷ページのため調査、執筆、編集、進行管理補佐を担当

☆校正―「史料室だより」No.95

・来室／調査―他校学生。ヴォーリズ建築、女子教育について

☆史料室スタッフで大学学部変遷表、年表について協議

☆各種資料を調査し、学院各部の年表作成（酒井・谷川）

・校正―「東洋英和女学院 説教集3」歴史関連ページ

☆「東洋英和の英語教育」ファイル作成

・中高部英和茶会への永楽茶碗の寄贈の経緯とともに、10年を超えた活動について英和茶会の方がたに記録を依頼

☆『資料集第7号 村岡花子文庫 洋書目録』、入稿前の校正（～2021年1月18日）

・照会―他大学研究者より、文部省訓令第12号に対する東洋英和の幼稚科（小学科）の措置について

☆照会―村岡恵理氏、平野キャサリン氏より、『アンのゆりかご』英訳作業のため、東洋英和に関する諸々の事項について。資料提供も行う

☆資料整理―120年史編纂資料ほか年史関連資料

・野尻50周年記念誌　第5回編集会議（中高部にて）

・執筆―「楓園」91号「史料室レター」30

・野尻50周年記念誌のための座談会にて撮影、録音、会場設置担当

・来室／調査―本学教員。保育関係資料

・河野和雄先生（元中高部音楽科）より、『野尻キャンプサイトの20年』編纂時に参考にした資料の所在についてご教示あり

・来室―野尻基金支援の会メンバー。貴重な写真とともに当時の建物のことなどについてご教示あり

・照会―海外ドラマ「アンという名の少女」と原作の相違について

・VHSビデオテープのデジタル変換資料を整理

2020年11月

☆大学卒業アルバムのため沿革ページの新データ作成

・「史料室だより」No.95発行、70代以上の全同窓生に配布し定期講読希望者を募集

・4日　研修―オンラインにて図書館総合展の資料のデジ

タル化についての講演を視聴（松本・三笠）
・野尻50周年記念誌のため中村攻先生（元中高部数学科）を招いて野尻の管理などについてインタビュー、記録・撮影担当
・「史料室だより」No.96の原稿依頼確認、誌面構成検討
・照会―総務課より、青山霊園のオドラム夫人のイニシャルについて→『来日メソジスト宣教師事典』より「Mary E.」と確認
・調査―大学図書館にStanley Jones著書の書誌情報について→大事な著作のため移管していただく
・来室／閲覧―保育部会役員。「はぐくみ」最終号編集のため画像閲覧、画像提供多数
・校正―「楓園」91号の歴史関連ページほか
・照会―GHY所蔵の卒業生斎藤博子氏の絵画について
・野尻50周年記念誌　第6回編集会議（中高部にて）
・18-19日　研修―オンラインにて国立女性教育会館「デジタルアーカイブ概論」ほか参加（松本）
・照会―山梨英和学院史料室より、村岡花子の著作権について→TPP締結により70年に延長した旨お伝えする
・来室／調査―中高部教諭。野尻のボート、ヨットについて
・照会―村岡花子訳『アンの友達』の改訂された言葉について
☆「史料室だより」講読希望者整理
・校正―「東京人」（2021年2月号）英和の制服の記述
・来室／調査―中高部教諭。野尻夏期学校について

2020年12月

・野尻50周年記念誌のため、亀井（旧姓　光木）佑子先生（元中高部家庭科）にインタビュー
・照会―刑部芳則日本大学准教授より、東洋英和のセーラー服の制定が昭和2年、現在のデザインとなるのが昭和4年でよいか→『東洋英和女学校五十年史』14頁、21頁に記載あり
☆コロナ禍のため配布の機会が少なくなっている「史料室だより」を、元保護者の方々が自主的に配ってくださる
・片山泰輔静岡文化芸術大学教授による港区の文化政策についての講義をオンラインで視聴（松本・三笠）
・校正―明石書店『現代カナダを知るための60章 第2版』松本が執筆担当したコラムページ
☆照会―東邦大学法人本部経営企画部資料室より、理学部のルーツである家庭科学研究所高等部で村岡花子が1934年頃に児童文学の講義を持っていた事情について→『額田豊・晉の生涯』の記載、東京婦人会館会報などを紹介、村岡家にも問い合わせ
・佐々木肇氏（元職員）より『野尻キャンプサイトの20年』索引データを拝受
・照会―イタリア人研究者より、村岡花子の画像について
・野尻50周年記念誌　第7回編集会議（中高部にて）
・照会―総務課より、文様に使用できるような建築意匠などあるか？→旧校舎のディテール図、写真データを提供
・建物閉鎖のため整理を進めているガーネットハウス横浜（GHY）所蔵資料について、史料室での所蔵状況と照合

2021年1月

・7日　緊急事態宣言再発出。史料室委員会開催などを調整
☆校正―『アンのゆりかご』英訳原稿、東洋英和に関するページを中心に。池田明史学長、Patricia Sippel本学名誉教授も校正協力
☆照会―他校学生より、戦前戦中の英語教育について
☆2021年度大学フレッシュマンセミナーについて担当教員と協議・教材修正
・大学では『カナダ婦人宣教師物語』を今年度新入生には2月に、次年度新入生には4月に配布資料に含めて送付
・『資料集第7号 村岡花子文庫 洋書目録』入稿
・調査―斎藤實記念館に、斎藤實と春子夫人はクリスチャンか？→クリスチャンとの関わりが深かったが、斎藤實夫妻がクリスチャンであったという認識はないとのこと
・野尻50周年記念誌　第8回編集会議（中高部にて）
☆校正―2022年度「大学案内」歴史関連ページ
・22日　第3回史料室委員会　オンラインにて開催
・照会―中高部教諭より、井上健之助先生（元中学部長）のプロフィールについて
☆「史料室だより」No.97 の音楽特集のため調査・原稿依頼
・照会―音楽ライター深水恭子氏より、卒業生でピアニストの井上二葉氏は戦中学校内工場（沖電気）で働いていた→「史料室だより」No.3とNo.75、No.76を紹介
☆『資料集第7号 村岡花子文庫 洋書目録』校正（～2021年2月25日）
・大学より「東洋英和の歴史」講義開講延期のお知らせ
・照会―学生支援課より、JASRACに登録されている東洋英和女学院の校歌について→JASRACデータ「183-5411-4」は80周年の時に作詩：鵜沼幸先生、作曲：冨岡正男先生で作られた「東洋英和の歌」に該当

2021年2月

・来室／調査―鳥居坂教会野村稔牧師。教会動画作成のため鳥居坂教会関連の画像を検索
☆来室／調査―幼稚園長、教諭。幼稚園の音楽教育関連資料について
・調査―東洋英和幼稚園へ、「光芸フィルム」について。現在は使用されていないため、大学などで研究材料にならないか大学保育子ども学科教員に相談
☆照会―大学図書館より、展示素材について
・照会―総務課より、片山廣子の卒業年について→1894（明治27）年に日本語科も英語科も卒業
・照会―村岡美枝氏より、講談社版の『アンの友だち』冒頭のモンゴメリによるひなぎくの詩の典拠は？→史料室所蔵の村岡花子の洋書の冒頭箇所からは発見できず
☆照会―上野巳熊は東洋英和女学校で教えていたか？→『東洋英和女学校五十年史』の教師一覧などでは確認できず。関連各機関、Sippel本学名誉教授に問い合わせ
・野尻50周年記念誌　第9回編集会議（中高部にて）
・「史料室だより」No.97音楽特集のため卒業生津屋式子氏、村岡恵理氏とオンラインミーティング
・執筆―「楓園」92号史料室レター31ほか
・調査―野尻にかつてあった「ゲストハウス」の画像→複数の旧教員にあたるが発見されず
☆執筆／編集―「史料室だより」No.96

2021年3月

・照会―同窓生（研究者）より、藤田たきが登壇した講演会資料について→「東洋英和新聞」 第76号、1961年YWCAカンファレンスしおりに記録あり
☆『120年史』の年表と現在作成中の年表との照合・確認・修正（酒井・谷川）
・『資料集第7号 村岡花子文庫 洋書目録』納品、発送
・5日　緊急事態宣言2週間延長（3月21日まで）
・調査―野尻にあったゲストハウスをめぐって、河野和雄

先生より当時の様子、見取り図についてご教示あり
☆校正―「史料室だより」No.96
・17日　高等部卒業式に合わせて展示コーナーにミス・カートメルの聖書を一日だけ展示
・野尻50周年記念誌　第10回編集会議、初校校正合わせ
・校正―「楓園」92号「史料室レター」ほか
・調査―同窓生藤間春素娥氏に在校時の話を聞く
・大学図書館より、図書館の歴史展示報告あり
・相談―小学部の先生がたと今後の資料整理について
☆村岡家をまじえ関連部署と村岡花子記念講座企画・準備

【おもな移管資料】
・中高部より、野尻関連資料（写真、建築図面等）
・中高部音楽室より、冨岡正男先生、河野和雄先生資料
・高等部長室より、中学部修養会文集・アルバムほか
・中高部聖書科より、1989年大喪の礼の日の対応記録、卒業礼拝式次第、長野彌名誉院長追悼式次第ほか多数

【おもな受贈資料】
・フェリス女学院より『フェリスのあゆみ　年表と写真でたどる150年』、「フェリス女学院　創立150周年を迎えて」、150周年記念品
・河野和雄先生（元中高部音楽科）より、オルガンなど音楽関連資料一式、宗教教育、野尻関連資料一式
・1949年と1954年の記念バッヂ
・多数の卒業生より、野尻キャンプ写真・画像データ
・村岡家より「安中様　カートメル」写真1葉（京都　堀真澄撮影。学院に所蔵のないミス・カートメルの新画像）
・父親有志の会 音楽関係DVD 、アルバムほか
・高志の国文学館より亜武巣マーガレット先生紹介画像

（書籍・雑誌・論文）
・イズミ・タイトラー氏（1969年高等部卒）より「書物学」18、勉誠出版、2020年（イズミ・タイトラー氏「蔵書を通して見る日本との出会い　オックスフォード大学ボドリアン図書館の和古書コレクション」所収）
・森　涼子氏（1969年高等部卒）より、自著『造語法で増やすドイツ語ボキャブラリー』白水社、2020年
・山内晴子氏（1962年高等部卒）より、『はじめての渋沢栄一』ミネルヴァ書房、2020年（第14章執筆担当）
・トロント公共図書館　梶原由佳氏より、「こどもとしょかん」166号、2020年夏（梶原由佳氏「トロントの「少年少女の家」とオズボーン・コレクションの昔語り」所収）
・野尻美枝　川村学園女子大学准教授より、「保育学研究」第58巻、第2・3号合併号、2020年（野尻美枝氏「20世紀初期の日本における恩物積木の実践」所収、資料提供で協力）
・「東京人」 編集室より、「東京人」2021年2月号（刑部芳則　日本大学准教授「セーラー服の百年史」所収、画像提供で協力）
・栗原たつ子氏（1945年高等女学科卒）より、『孫たちへの証言　第33集』新風書房、2020年（栗原たつ子氏「『東洋英和女学院』の英の字が『永』に」所収）
・NHK短歌編集部より、「NHK短歌」2021年2・3・4月号（片山廣子の画像提供で協力）
・村岡美枝氏より、村岡美枝氏翻訳『ひびけ　わたしのうたごえ』福音館書店、2021年→幼稚園、かえで幼稚園、小学部に頒布
・『女子校という選択』『名門小学校　最高の授業』『名門中学　最高の授業』ほか
・『広岡浅子の生涯』宝島社、2015年（村岡花子に言及）

【おもな画像データ・資料提供】
・高等部長へ、創立記念礼拝のためラージ先生関連の画像15点
・学生支援課へ、学院創立記念オルガン賛美礼拝Web動画作成のため画像19点
・日本ピアノ教育連盟へ、ピアニストの井上二葉（1948年高等女学科卒）のWeb動画作成のため戦前の東洋英和の画像4点
・鳥居坂教会へ、鳥居坂教会Web動画作成のため鳥居坂教会関連画像約20点
・山梨日日新聞へ、村岡花子の足跡をたどる特集記事を掲載するため村岡花子文庫展示コーナー画像1点

展示コーナー休業のおしらせ

「学院資料・村岡花子文庫展示コーナー」（六本木校地　本部・大学院棟1階）は、新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡散防止のため、当面休業いたします。再開については学院ホームページ等でおしらせいたします。ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

訂正とお詫び

「史料室だより」No.95「年表にみる　野尻キャンプサイトと東洋英和」のうち、8頁「1942（S17）野尻にて初等科鍛錬夏期学校…」は、正しくは「初等学校鍛錬夏期学校」でした。
また、9頁「1998（H10）野沢キャンプ…」は、正しくは「野尻キャンプ」でした。謹んでお詫び申し上げます。

既刊の「史料室だより」もお読みになれます

「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。「東洋英和　史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。
URL：https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/

資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただけると幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合せ先】　東洋英和女学院史料室　〒108-8507 東京都港区六本木5-14-40
Tel 03-3583-3166（直通）　Fax 03-3583-3329　E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp